



## 本居宣長 篇1

### 松坂の古典研究家

享保15年(1730)、伊勢国松坂の木綿商の家に生まれ、のちに医者となった人物がいました。彼の名は、本居宣長(もとおりのりなが)。国学者・文献学者としても活躍しました。

医業の傍ら、『古事記』、『日本書紀』、『万葉集』、平安文学などの研究を行いました。当時、十分に解説できていなかった『古事記』の解説に成功し、『古事記伝』という書物を明和元年(1764)から寛政10年(1798)にかけて執筆しました。そして、版本としての刊行は、寛政2年(1790)から文政5年(1822)にかけて行われました。

このように長い年月をかけて完成した『古事記伝』は、『古事記』の註釈書というだけでなく、のちの古代文学や古代史の研究にも大きな影響を与えています。現在の『古事記』の註釈書は、基本的には宣長の採用した読み・解釈にその後の研究による訂正を加えたものが主流となっているといっても過言ではありません。

宣長は、古典の調査・研究などのため、各地を旅しました。明和9年(1772)の3月5日から14日(旧暦)には、宣長ら一行6名が松坂(松阪)から吉野や飛鳥を巡りました。宣長は、この旅の様子を寛政7年(1795)刊の『菅笠日記(すががさのにつき)』という書物にまとめています。

